

## 紀要 40 号・大学 50 年の節目、 歩みをさらに進めよう

学部長・研究科長 菱沼 典子

紀要第 1 号が発刊された 1973 年は、本学が大学に昇格してから 10 年目、看護の日本最古の学会である日本看護科学学会誕生の 8 年前である。看護系の大学は全国で 9 校の時代であった。

大学には知の創造とその伝達という役割がある。知の創造は研究によってもたらされる。看護に研究があるのか、看護は学問として成り立つのかを、1964 年の大学化、1980 年の大学院設置、さらに 1988 年の大学院博士後期課程設置の際に、常に社会から問われ続けた。つまり、看護の領域で、どんな研究が成されているのか、どんな論文があるのか、学と呼ぶにふさわしい知の創造が成されているのかが、繰り返し問われたのである。それほどに看護は、その現象をデータ化、言語化せず、説得力がないまま経過していたのである。

大学や研究所などの研究機関が、独自にその機関の研究成果を発表する場が紀要であり、学会誌がない中で、10 年目の紀要は遅かったかもしれない。しかしこの紀要の存在は、看護が学であることを示す、一つの証となり、今日まで証であり続けている。40 号を迎えた今日、看護学を学べる大学は 216 課程まで増加しており、大学院も数多くなっているが、それでも看護は学問ですかという問いがなくなっていない。しかしこの紀要を示すだけで、看護学を説明できるまでに成熟したと思う。日本において学問としての看護の軌跡は、この紀要にあるとも言えるだろう。

論文発表の場がなかった時にその場を提供した本紀要であったが、20 号、30 号と発刊される間に、看護系の学会がどんどん誕生し、研究発表の場が広がった。学術業績として、紀要よりも上位に置かれる学会誌が多くできたことで、紀要の役割が研究発表より、年報のような記録を残す場になっていった時期もあった。1996 年に年報を発行するようになり、紀要と年報の役割が整理された。紀要の役割は研究発表の場であることはもちろん、教育実践の工夫や評価、あるいは看護実践の内容や評価、WHO 協力センターの活動を報告し、本学の教育や社会貢献の中身を記録していく場としても重要な役割があると、改めて確認されていると思う。

さて翻って 1973 年 7 月という紀要 1 号の発行の時、筆者は本学に 4 年生として在籍していた。1 単位が 90 時間の実習科目の設定に、ここは大学なのかと疑義を呈していた日々に、突如「学生便覧」ができ（1972 年 3 月）、突如「学園ニュース」が発刊（1972 年 9 月）され、続いてスクールカラーのブルーの表紙の「紀要」なるものが発刊されたのであった。大学に昇格した混乱期を抜けて、大学としての形が様々に整い始め、研究を推進していく方向性が鮮明になったことを、



紀要発行に見てとれる。それでも看護職の育成と看護学研究のつながりが見えずに、学生そしておそらく教員も、悶悶としていた時が続いていた。筆者が1976年に助手で入職した頃も、教育第一、時間があるなら研究はご自由にという雰囲気であり、紀要だけは有ったものの教育と研究を行う大学の機能は、まだまだ果たせていなかった。

大学となってからの本学の50年のあゆみも、また紀要40年のあゆみも、看護学の学問としての確立への内なる格闘の積み重ねであり、また同時にその結果として社会への説明責任との格闘であったと言えるのではないだろうか。大学院設置から30年余り、看護研究は目覚ましい発展を遂げた。学問としての確立をめざしているというのは、もう過去形であり、研究成果を教育ならびに実践に活かしていく時代に入っている。看護に関わる現象のデータを言葉にし、概念あるいは理論でその現象を説明し、看護技術開発に結び付けて、現場に活かす、そのプロセスを積み重ねていくのが看護研究である。この看護研究の推進には実践現場との連携が必須であり、幸いに大学50年の節目に、大きな舵を切ることになった。学校法人下における聖路加国際病院の統合は、看護研究の成果を実践と教育により適用させる組織改編であり、今後の本学の発展と看護研究の発展、そして看護実践の進展を約束するものである。トイスラー先生がめざしたキリスト教精神のもとでの日本の医療の質向上に、聖路加が今後とも貢献していくことを、強く期待している。

